

「昭和残日録」—記憶に残る女優たち

徳山 望月 一徳

令和 6 年 6 月 9 日に久我美子さん（昭 6 生）が亡くなりました。享年 93 合掌

久我美子さんと言えば、皇室につながる華族の出身であることが話題になりましたが、一般市民が仰天したのは「また逢う日まで」（昭 25）で、恋人役の岡田英次★¹と窓ガラス越しのキス・シーンでした。

昭和 25 年と言えば、13 年生まれの方は 12 歳そこらの子どもですから、後年に観た（勿論白黒画像）のが、記憶に残っているんです。

戦後も間もない、男は払い下げの軍服、女はモンペ姿でお昼を報らせるサイレンが空襲警報と錯覚する頭の切り替えが、まだ出来ていない頃の映画ですから、随分世間がザワツキました。

えっ、人前で接吻するのッ！ 許されるのッ！

当時の頑固ジイさんたちは、仮にも華族の娘が、あってはならんことだッ！・・・と言ったかどうかはしらんけど、まあ、そのくらいのショックはあった、と思いますよ。

その接吻（当時の表現）シーンで、恋人役の岡田英次も有名になりましたが、いいですか、たかが窓ガラス越しですよ。それが大騒ぎになったんですから、当時の人たちの純情なこと。

あれから 70 年！

大都会の駅のプラット・ホームでは、別れを惜しむ若い男女の接吻風景は、めずらしくないそうですね。脱線ついでに、乗り物の中での化粧は、もう常識になって、あきれて見ていると、危険人物（ノゾキ）にされる時代です。気をつけましょう。

★ 1 岡田英次（大 9 ～平 7・75 歳没）・・・木村功★²らと劇団青年俳優クラブを設立。「真空地帯」「ひめゆりの塔」など、社会派の個性的俳優。

「ここに泉あり」（昭 30）では、岸恵子と夫婦役。

★ 2 木村功（大 12 ～昭 56・58 歳没）・・・「七人の侍」（昭 29）では、元服前の若衆の役で百姓の娘（津島恵子★³）の恋人役を務めた。

★ 3 津島恵子（大 15 ～平 24・86 歳没）・・・「ひめゆりの塔」「七人の侍」では、28 ～ 29 歳です。おしとやかな感じの美しい人。



かくのごとく映画は、戦前戦後を通じて、もっとも庶民的な娯楽でした。記憶に残っている女優と言えば、昭和 20 年代に集中しています。

戦前戦後は、気品があって並外れて美しい人が多かった。私が高 3（昭 30 春・18 歳）の時、若く美しい人が週刊誌の表紙を飾っていたので、教科書のカバーにして悦に入っておりました。それが有馬稲子さん（昭 7 生・当時 23 歳）です。

あれから 60 年！ 平成 29 年に、“徹子の部屋”で再会—紛うことなき有馬稲子（当時 85 歳）で、「この頃は一人芝居をしてる。いつまでも現役でいたい」—これが「はなれ瞽女おりん」（水上勉原作・盲目の旅芸人の物語）で、海外でも公開されロングランを記録しました。さもありなん！

小津安二郎監督の「東京暮色」（昭 32・稲子 25 歳）は、私が後期高齢者となってから観ました。代表作は、映画ではなく舞台の“はなれ瞽女おりん”です。

最近、“徹子の部屋”は、本人が高齢（昭 8 生・90 歳）のせいか、超高齢者をヤタラ紹介することが多いが、昔のファンは、せっかくのイメージを壊されるので、やめてもらいたい。我が身は年を取っても憧れの人は、年を取ってもらいたくない—それがファン心理というものタイ（博多弁です）。



久我美子、有馬稲子とくれば岸恵子（昭 7 生・代表作「君の名は」「雪国」）を外せません。この 3 人は、五社協定（他社に出演させない悪法だった）を意識して“映画を自由に創る”をモットーに、“文芸にんじんくらぶ”（昭 29）を創立します。さすがに昭和一代人間のナニクソ精神です。現代の左翼主義者が最も嫌う時代に教育を受けた人たちです。この年代の人達が、どんどん亡くなっています。この一代人間が亡くなってしまうと、日本の将来は危うい！

何故なら、あとはロクな人間が残っていない。私（昭 13 生）を含めて自分さえよければいい、という人間ばかりです。国会議員をみよ！

閑話休題・年齢は、久我が一つ上の 6 年生まれで、有馬、岸は 7 年生まれ。おまけに 3 人とも飛び切りの美人とくれば、「私がイチバンの美人よ！」と鼻持ちならないはずなのに、息が合うなどとは奇跡に近い。五社協定が悪法だったこともあるし、このくらいの美人ともなると、自分の容貌に確たる自信があるんでしょうね。お三人ともそれはそれは、美しゅうございましたよ。

特に岸恵子さんは、「君の名は」（昭 28・原作 菊田一夫）で爆発的人气（真知子巻きも流行）でした。まず NHK のラジオ放送（昭 27～29 年）が先行します。

昭和 20 年の東京大空襲で偶然に出会った男女★⁴が、助けあって命からがら数寄屋橋にたどり着き、半年後の再会を約束して別れたものの、逢えそうで逢えないのが延々と続く大悲恋物語です。

南は九州から北海道へ物語は展開—作者の菊田一夫の作戦通り、日本中の女性と子供が、興奮の坩堝に巻き込まれました。あまりの人气に放送時間になると、女風呂がガラ空きになったという都市伝説もあり、私も当時 15～16 歳ですから、楽しみに欠かさず聴きました。

主人公の名は、“後宮春樹に氏家真知子”。ナレーションは、雨宮良子さん（昭 6 生・82 歳没）で—「忘却とは忘れ去ることなり。忘れ得ずして

忘却を誓う心の悲しさよ」のセリフで、ラジオドラマが始まります。まっこと、当時の日本人は純粋で、わずかな娯楽で戦後の復興に努力したものです。

かくのごとく、私にとってもラジオ放送の「君の名は」は、懐かしいドラマです。

★ 4 出会った男女の男とは・佐田啓二（大 15～昭 39 交通事故で没・享年 38）で松竹の三羽カラスといわれた。俳優の中井貴一、貴恵は遺児。

後日談・その 1 東京の学会の際に、何時だったか忘れたけど、わざわざこの数寄屋橋を訪ねました。既に川はなく（暗渠か？）、欄干は残っていたように記憶しています。

その 2 平成 26 年末ごろ「君の名は」の映画同好会の開催（徳山）で北海道編を鑑賞しましたが、主人公（後宮春樹）が馬車で移動するそのテンポの遅さに呆れて、途中で映画館を出ました。

懐かしの映画は、記憶の中で楽しむものと気がつきました。しかし「カサブランカ」（昭和 17 年作 ハンフリー・ボガード、イングリット・バーグマン）は、いつ観ても感慨も一入なんですがね。なにしろ鼻の高さが違いますからね。

その 3 岸恵子さんは、これも何時のことだったか忘れましたが、徳山に講演に来たことがあります。講演が終わった直後に、ライトで目がくらんだままで演壇を下りたので、躓いて一瞬こけそうに一本当に、危なかった。傍に誰もおらず、手を貸すものがいなかった。

フランスだと、こんなこともあろうかと気の利く男性が演壇の傍で待ち受けて手を差し伸べたに違いないのに、徳山の男は「気が利かないわね！」と彼女は、思ったに違いありません。

やはり、日本人のレディー・ファーストは身についていない、もしくは永遠に身につかないと思った瞬間でした。

三人の美女に乾杯！ 本当は、“君の瞳”をいたいけど・。（文中、敬称略）

令和 6 年 6 月 28 日 文責 望月一徳